

2017年度 政策提言ツアー 実施報告書

実施日:2018年2月26日

意見交換:財務省(主計局)、国土交通省、農林水産省、文部科学省
参加者:赤井ゼミ¹学生14名、引率教員3名(赤井・倉本・足立・宮錦・金坂)



¹ 連絡先: 赤井伸郎 (大阪大学国際公共政策研究科教授) akai@osipp.osaka-u.ac.jp

目次

1. 政策提言ツアー企画の経緯.....	2
2. スケジュール.....	2
3. 写真.....	3
各省庁との意見交換会(午後).....	4
3. 学生コメント.....	5
3.1 財務省.....	5
3.2 国土交通省.....	7
3.3 農林水産省.....	9
3.4 文部科学省.....	11
4. 政策提言ツアー実施の効果:企画者のコメント.....	13

1. 政策提言ツアー企画の経緯

大阪大学法学部国際公共政策学科赤井ゼミ所属の学生が2017年度に執筆した論文(題目「道の駅の有効な活用を目指して」)が、ISFJ(日本政策学生会議)において、政策提言賞を受賞した。論文において提言した政策に関して、実際に、その政策を所管する省庁に訪問し、提言を行う機会を得た。受賞した論文およびその他の班の論文は、国土交通省(道の駅の有効な活用)、農林水産省(集落営農法人化による農地保全を目指して)、文部科学省(中学校教諭の多忙化解消)の政策にかかわるものであり、その政策担当者と議論する機会を持つことにした。

本ツアーに御協力いただいた多くの皆様には、学生に貴重な体験の機会を与えていただいたことに、深く感謝したい。

2. スケジュール

9:10 大阪大学 東京オフィスに集合

9:20-12:00 省庁訪問:財務省主計局:政策提言(調査課、農水係、文科係、国交係)

12:00-13:00 ランチ(財務省食堂)

13:00-14:00 省庁訪問:国土交通省:政策提言「道の駅の有効な活用を目指して」

14:30-15:30 省庁訪問:農林水産省:政策提言「集落営農法人化による農地保全を目指して」

16:00-17:00 省庁訪問:文部科学省:政策提言「中学校教諭の多忙化解消に向けて」

18:30~ 懇親会(財務省の皆さまとともに)

3. 写真

財務省訪問(午前)と意見交換

公共係



文科係



農水係



各省庁との意見交換会(午後)

国土交通省



農林水産省



文部科学省



3. 学生コメント

3.1 財務省

財務省への政策提言での発表・議論(自分の班および、他の班)から感じたこと、学んだこと:発表・議論で得られたもの(テータで見る政策と、現場で見る政策など)、省庁のハードの印象・省庁のソフトの印象(担当者)など

"

1. 赤井先生の、なぜ日本で財政健全化が一向に進まないのかという質問に対する回答が印象に残っている。国民の自助・自律意識が弱いというものである。これは先月から 1 か月程度過疎地域で生活して感じたこととも整合的だと思ったからだ。一方で、日本においては税金で集めた金の使い方にも問題があるとも感じている。税金がどう使われているのか、効果的に使われているのかを詳らかにするためにも、官僚のみなさんにはぜひ頑張ってもらいたい。
2. 財務省での意見交換では、政策を数字の面から切り込む財務省らしく厳しい意見やテータ分析に精通した方々の意見がめだった。財務省としては、それぞれの政策にどのような意見を持っているか拝聴する、いい機会であった。ただし、いくら調査をし、電卓を弾いて損だ無駄だと言いつつも、現場の利害関係や歴史的な背景の壁は大きく、政策決定ではそのような事項を加味しながら慎重に検討していかなければならないという課題がわかり、世の中うまくはいかないなと思った。
3. 道の駅班では「道の駅のそもそもの存在意義を問い直す必要性がある」、農地班では「なぜ耕作放棄地を復元しなくてはならないのか」、教育班では「そもそも教員は忙しいのか」、といった問題の根本、課題設定に関する意見が財務省の職員から共通して出ていたので、実際に政策を考えるうえでそういうところを大切にしているのだなと感じた。また道の駅での「自治体の想定は甘い」、教育班での「現場はモノではなく人を増やすことしか要求しないがそれは国のお金で問題を解決しようとしている可能性がある」という意見からも、財務省が批判的に物事を見ているというイメージがより強くなった。
4. 財務省においては課題設定や政策提言の解決性について幅広い角度からのアドバイスを頂くことが出来き大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。テータの妥当性や政策実施主体についてなど私たちが普段、意識して議論している点についても盲点を指摘して頂いたことは来年度以降のゼミにも繋がるのではないかと感じました。また、政策の内容について自治体にとって更に厳しい内容を提言するべきだという意見を頂きましたが、ISFJ でも経産省の審査員の方に同様の意見を伺ったことから国全体を俯瞰して政策立案を行う官僚の方ならではの視点かと感じました。
5. 政策策定を行う各担当省庁とは異なった、限られた予算を管理する財務省ならではの視点からの指摘が多かったように感じた。論文上では、社会課題解決に対して 1 つの解決策に着目することが多いが、実際の現場においては様々な政策を組み合わせていくことを念頭

に置く必要性を感じた。また、社会課題が本当に課題であるか、現状分析における定量的な課題の提示の重要性を学んだ。

6. ゼミで議論し慣れていることもあり、反応に関しては想定内というイメージであった。やはり国の予算を扱う部門とあって視点は厳しく、今後も日本財政が破たんしないように監視機能を高めていてもらいたいと感じた。
7. 財務省として国民の税金を配分するという重い責務を負っている分、課題の本質を見抜くことが本当に重要であるのだなということを感じた。どの担当の方も、「現状分析での課題は本当に課題なのか」「もっと根本的なところや上位に問題があるのではないか」という姿勢で取り組むことが重要であるということをおっしゃっていて、私たち学生とはやはり大きく違う、一つの政策に止まらない幅広い視点を持って現状分析を行っていくことの重要性を痛感した。
8. 財務省では、予算を実際に使って本当にそれなりの効果があるのかであったり、そもそも各省庁の公表しているデータや資料、主張などに何かしらの意図や恣意が隠れているのではないか、といった視点から発表を聞いていただいていた気がした。財務省という場所がそれほど薄暗いところだとは予想していなかった。予算を使って政策をするということが大変そうだということがよく分かった。
9. 自分の班に関しては、もっと学生らしく突っ込んだ意見を主張してもよいといわれ、論理展開も重視しつつ、問題についてリサーチしていく中で得られた自分たちの課題に対する信念をもう少し大事にしてもいいのではないかと感じた。他の省庁の予算を査定する主計局の方ということもあり、エビデンスに基づく議論を重視しておられて、目の付けどころはとても勉強になった。また問題の解決手段としてコストを削減するような代替案を考慮するなど、日々の主計局でのお仕事が垣間見えた気がしてとても刺激を受けた。
10. 最初に日本の財政について説明して下さった際、なぜ日本では財政再建が進まないのかというお話で、海外の方がコスト意識が高く、日本人は負担したがるのに政府に多くを求め、という話があり、とても納得感があった。農地班の発表の際「パラメータのすべてが効果のあるものとして有意になっていてもいいのに、4つしか有意になっていないことに驚いた」というコメントをいただき、政策の効果を図るために経済学のモデルが役に立つのだということに改めて感じた。財務省の建物はとても古く、年季が入っている感じがした。また、建物の中もひんやりしていて、節約意識が高いのだろうと感じた。
11. やはり数か月ぶりの発表ということもあり、また実際に国政を動かしている財務省の方を前に発表したこともあり、なかなか普段通りの発表ができなかったと感じている。そんな時間の中で心に残ったことは、日本の財政が健全化しないのは、日本人の「政府に求めるがおカネは出さない」というマインドが一因であるという考え方である。それはおそらく、江戸時代から続く「政治はお上がやるもので自分たちは関係ない」という考え方と、明治以降の「国は自分たちが動かせるという」国民主権の考え方がいびつに混ざり合ったものなのではな

いかと感じた。なににせよ、自分の将来や社会貢献とはなにかについて考える良い機会になった。

12. 財務省を訪問して受けた印象は大方、当初のものとは違わず、支配的、保守的、権威的、エリートといった感じだった。実際に働いていらっしゃる官僚の方々も男性が多く、それも洗練された（少なくとも見かけは）人が多かった。そんな財務省の方からいただいた発表のフィードバックはいかにも国の予算を握るお立場からのものだったように感じる。しかしそれは強固なロジックと多彩な経験に裏付けられたものであり、財務省に YES と言わせることに四苦八苦する他省庁の気持ちが少しわかった気がした。だが逆に言えばそこまで突き詰めて考えないと政策の有効性は信頼されないのだなあと思った。

3.2 国土交通省

国土交通省への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの（データで見る政策と、現場で見る政策など）、省庁のソフトの印象（担当者）など

1. 一昨年と比べ、多くの官僚の方が参加されていて驚いた。道の駅は特に地方自治体の裁量が大きく、経営面の課題などを中央では認識しているものの、積極的にコミットしようという意思は低いのかなと感じた。一方で、質問にあった情報公開について、なかなか自治体が行いたがらないことであるので、自主性に任せるばかりでなく一定の強制力のある枠組みが必要で、その方法も考える必要があると感じた。
2. 一昨年に CASBEE の提言ツアーで訪れた時や、クルーズ提言の際に訪れた時に比べ、大きな会議室で丁寧な議事、総務省も合わせた多くの官僚さんが参加されており驚いた。ゼミ生は緊張もあったと思うが、しっかりと意見交換をしておりよかった。ぜひ道の駅連絡会の方にお伝えしたいとおっしゃっていて、実際に自分たちの提言が政策立案者や関係者に届くというのは嬉しい。
3. 「政策提言が経営改善に寄りすぎている。道の駅は金もうけのためだけの施設ではない」といった指摘をいただいた。数字を意識するのは論文としては当然であり必要なことだが、本来の目的との整合性をとるのが難しいと感じた。情報公開はどのような形態を想定しているのかという指摘をいただいたが、政策実行者としては提言では詰めるのが難しい具体的な部分が気になると感じた。
4. 道の駅、第三セクターの政策に携わる霞が関の官僚の方の意見を伺うことが出来、大変意義のある場だと感じました。特に国土交通省の方から定量分析の内容について詳しく質問をして頂いたことが印象に残りました。EBP の取組が進む中で省庁の中でも経済的な分析についての関心が高まってきているのかと感じる事が出来ました。また論文で扱った変数以外に経営向上の要因となりうる指標について意見を頂くことが出来たので今後のゼミ活動にもつなげていきたく考えました。

5. 文科省や農水省に比べて、定量分析部分への指摘が多く、定量的根拠に基づいた政策実施を重視している印象を受けた。定性分析への反応から、国交省や総務省は都道府県までの状況は把握しているが、現場に近い市区町村や道の駅の状況や意見について、詳細について把握していないように感じた。
6. 総務省の方も議論に参加しておられ、非常に大規模な場を提供していただいたと感じた。政策が複数の省庁の相互関係で成立していることを改めて把握し、縦割り行政といえど協力体制の必要性を深く認識することができ、個人的に新たな発見となった。
7. 自身の班の発表であったが、やはり現状分析のストーリーの甘さを再実感した。自分たちが本当に問題としたかったことや伝えなかったことについて、いまひとつ上手く伝えきれなかった印象である。また、分析のことについて詳しく聞かれ、実際の政策立案の現場においてもやはりデータ分析を用いた PDCA サイクルを回していくことが徐々に重要視され始めているのだなと感じた。
8. 国土交通省のほうであれだけ準備したいただいているとは予想していなかった。議論の流れがやや形式的というか、淡々と進んでいったという印象がある。官僚の物事の進め方なのかなと感じた。担当者のほうも、分析自体に関してよりも、実際の事例としてどうか等といった質問を多くしていた印象がある。やはり実際に政策をしている側としては、実際にうまくいっている事例をみてそれを応用させようという意識が強いのかもかもしれない。
9. 担当者の方と道の駅の抱える問題を共有でき、公の立場から道の駅の運営において利益をあげることが自己目的化しないように意識されていることが実感できた。また財務省と国交省の双方の担当者と議論を通じて、省庁の単位だけでなく、担当者個人の問題に対する視点からも政策立案、意思決定のプロセスにおいて、財務省はミクロ経済学でいうところの費用最小化問題に、国交省をはじめとした他の省庁は効用最大化問題にそれぞれ直面しているような違いがあると実感した。
10. 道の駅の話で、トイレ掃除の回数が多かったり、洋式トイレの設置割合が高かったりすると収益が高まる、という話をされていたのが大変興味深かった。国の方でも、道の駅の収益向上のために様々なデータを集めて分析を行っていらっしゃるのだろうと感じた。
11. まず感じたのは、データを根拠にするにせよしないにせよ、学生が考えている程度のことはすでに官僚の方々も考えているということである。しかしながら、学生が提言をする意義がないわけではなく、日本社会に問題意識をもち、このような思いを持つ学生もいるということをお官僚の方々に伝えること自体が大切なことと思う。来年の論文では、実現可能性に加え、自らの思いに、より則した政策を提言できれば、その意味でも官僚の方々に何か更なるインパクトを与えられるのではないかと感じている。ハードについては、国交省に専用の庁舎がないことに驚いた。
12. 国土交通省の担当者の方は、現場を統括する錚々たるメンバーで、正直引いた。議論を拝見して感じたのは官僚の方も道の駅に対しては並々ならぬ思いと危機感があるんだなあと思ひ、プレゼンを聞いている担当者の方の興味津々な顔が印象的だった。また省庁の雰囲気

気自体は財務省に比べて中道という感じがした。官僚の方からの質問に怖気付くことなく、果敢に返答する中村さんには、相変わらずすげえなあ、と思って見ていた。

3.3 農林水産省

農林水産省への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの(データで見る政策と、現場で見る政策など)、省庁のソフトの印象(担当者)など

1. 農水省はいろいろな部局の担当者が参加して下さって、分野横断的に話を聞くことができたのがよかった。集落営農の法人化をしていないところがなぜしていないのかという質問が出ていたが、提言を練り上げる上で成功事例にはヒアリングすることは多いが、そうでないところに対してもヒアリングを行うことが重要だと再認識することができたのでよかった。
2. こちらも一昨年の農地班以来の訪問であったが、今回も前回同様大変熱心に提言を聞いてくださり、主要な政策関係者がご自身の部署や仕事の立場からコメントやご指摘をくださり、また学生の自由な意見を促していただいた。コメントの中にあつた、「農家さん(=現場)の意見をより取り入れて政策を考える必要がある」という言葉は、実際に我々が論文執筆する際についはまってしまう、行政目線の過度な尊重を改め、行政のカウンターパートや二次三次の関係者のことも考慮すべきだと気づかせていただいた。
3. 農業に関することはゼミとして論文執筆活動をする中で、実態把握が難しい分野の1つと感じていたが、農林水産省も実態把握に苦労している印象を受けた。論文では合意形成が課題の1つとして挙げられるなというイメージを持っていたところ、アンケート調査をすると、集落営農の代表者とその他で違いがでることがあるなど、実際に合意形成に関しての課題が存在していると知った。
4. 集落営農の法人化政策に携わる農林水産省の官僚の方の意見を伺うことが出来、大変意義のある場だと感じました。特に法人の代表者の意向が他の構成員と異なることが政策実施において課題となっているという指摘は、実際の政策担当者ならではの視点であると感じ印象に残りました。また、農水省の官僚であるからこそ農家の方の生の本音を聞き出すことが難しいという意見も印象的でした。このような点にアプローチ可能であることも、学生という立場で政策立案を行う強みだと改めて気づかされました。
5. 農地関係の職員さんだけでなく、統計関係の職員さんが来てくださり幅広い意見を伺うことができ大変勉強になった。伺った意見全般から、論文を執筆するうえで行政サイドからの視点だけでなく、現場の視点など学生ならではの意見が必要であることを感じた。特に、政策提言部分については学生らしいアイデアベースな提言や、学生だからこそ聞き出すことのできた現場の意見を活かした提言が必要だと思う。
6. 論文のどこがいいか、どこをもっと考慮すべきかを的確に指摘しておられた点で、現役官僚の議論の高度さを実感することができた。また、担当部署も多様であり、それぞれの視点が

少しづつ異なっていることからフィードバックに多様性があり、聞いていて飽きを感じさせないコメントの場であった。このように、テーマを複数の観点から考察することは非常に重要だと感じた。

7. とにかく来られている人の数が多くて驚いた。一学生の発表のために、こんなにも多くの部署が来てくださるといふ温かい姿勢に感動した。また、議論を通して、やはり農業は地域的要因や人の思いや慣習というものが大きく、そこに政策を国・都道府県レベルで打っていくことはなかなか難しいのだなということを感じた。しかし市町村は市町村で現在の業務量がかなり多いようであり、行政としてどう農家をサポートし、生産性を上げさせていくのか、というのは難しい問題であることを改めて認識した。
8. 農林水産省の担当者が発表と関係のありそうな部署から一人ずつ連れてきていただくという、あまりにも丁寧な対応をしていただき驚いた。大きな会議室での発表だったので議論をするというよりも、実際の担当者からのフィードバックをもらうという形になったが、それぞれ違うセクションからきている人たちなので、各々発言内容が多様であり、学ぶことが多かった。
9. 学生の提言であるにもかかわらず、多くの担当者の方におこしいただくとともに、発表に対して真摯に向き合っていたいただき、感銘を受けた。農業の中でも特に法人化などは個人のやる気や法人化に対する抵抗感など、各個人の感情が入り込む点がとても厄介であり、担当者の方々もその点に苦慮されている印象を受けた。一人ひとりに対して説明するコストを考えると、農家が自発的に法人化するようなインセンティブ設計が重要ではないかと感じた。
10. 農林水産省の担当の方が、「法人化していない集落営農法人に、なぜ法人化しないのかを聞いて欲しかった。国の人間では聞き出せないような本音を引き出してほしかった」とおっしゃっていて、私たち学生に求められているのは、そのような本音を引き出すことであるとわかった。来年私たちが論文を書く際の参考にさせていただき、ステークホルダーの方々の声を拾った政策提言ができれば、と思った。
11. 前の2庁舎に比べて、木が多く使われているなというのが第一印象であった。入り口だけでなく、各階のロビーや隙間から見えたテスクに至るまで、ところどころに木が使われていて、農林水産省らしさを感じた。また人に関しても、官僚の皆さんもどこか柔らかい雰囲気を持っているなと感じた。学生に対して「何故そのテーマを選んだのか」ということをしきりに聞かれていた。これを踏まえて、やはり官僚の方が学生に期待しているのは論理の精巧さだけでなく、日本社会にいかなる問題意識を持っているかということなのだろうと感じた。
12. 農水省は入り口から入った瞬間に、自然のパワー的なものに溢れており、省庁が違ってもこんなにも雰囲気が変わるんだなあと感じた。廊下の壁やテスクも木でできており、普通にいいなと思った。農水省の方はマイルドな感じで、学生の、おそらくはまだまだ議論の余地のある論文を寛容に見てくださっていた。また議論の際にはたくさんの資料を持参しておられ、今回の提言ツアーでは一番、現場をどうにかしたいという熱い思いを感じた。私は実家が農

家で、自分の暮らしと大きく関わってくる省庁なので、そこで働いていらっしゃる方の目が死んでいないことに少し嬉しくなった。

3.4 文部科学省

文部科学省への政策提言ツアーでの発表・議論から感じたこと、学んだこと：発表・議論で得られたもの(データで見る政策と、現場で見る政策など)、省庁のソフトの印象(担当者)など

"

1. 質疑応答で議論が白熱していたのがよかったと思う。特に3年生が論文執筆に携わってみて論文やプレゼンテーションでは表現できなかったところを、官僚を前に話せていたので。教諭の労働時間の削減が学力にどう影響を及ぼすのかという点は、もちろん考えなければいけないと思う。しかしながらデータ基盤が整備されていないということで、今後データ基盤整備が進んでいくことで日本の教育が少しずつ明るい方向に向かっていくのではないかなと思う。
2. これまでの提言ツアーの発表の中で、とてもエキサイティングな、魅力ある議論であった。文科省の皆様が熱心にコメントしていただいたのはもちろんのこと、学生からも論文執筆中に疑問に感じたことを率直にぶつけ、意見を交わし合う、双方向性のある議論であった。このような発表の機会では、学生は緊張したり変なツツコミを入れられてたじろぎたくない、という思いが先行してしまいがちだが、自分たちの調べたこと、考えたこと、感じたことに自信をもち、かつこの絶好の機会に学生の特権として忖度なく聞くことができるような提言ツアーを今後も行って欲しいと思う時間であった。佐伯くん、いろいろ聞けてよかったね。
3. 文部科学省は精神論のようなものが重視されているような印象を持っていた。しかし、政策提言ツアーにおいて、真っ先に分析モデルについての指摘が出るなど非常に論理性を重んじているという印象が変わった。国、県、市、教育委員会、学校などファクターが多く、それぞれの関係も複雑であったため把握が難しかったが、制度作りに関する提言ができればより良い提言になったと感じた。
4. 教師の多忙化に関わる文部科学省の官僚の方の意見を伺うことが出来、大変意義のある場であったと感じました。特に、担当の方が教師の業務の多さについて現場目線で熱くお話されていたことが印象に残りました。また議論においては教師の個票単位でのデータの拡充が研究の発展に繋がるといった意見もあったことから、個人情報を守りつつ研究を進められる環境を作ることが重要であると考えさせられました。
5. 文科省とは、特に議論が活発に行われてたと感じた。文科省・教育関係は定量的なアプローチが、他分野と比べて少ないイメージを受けていたが、議論や指摘を通して思っていた以上に定量的根拠に基づく政策策定を行っているように感じた。教育従事者へのアンケート調査等が省内でまとめられている途中であるということだったため、今後データが公開されることで、実証分析が可能になるのではないかなと思う。

6. 論文を執筆している時から調査だけで把握できる範囲には限界があり、今回の提言ツアーでそうした情報の理解を目指した。特に文部科学省との議論や論文に対するコメントでは、現場の視点や今後の取り組みに対する意欲的な姿勢を感じ、非常に有意義な時間となった。つい議論に熱がこもってしまうような、いい意見交換の場にすることができとても満足である。今後の文科省の動向に興味をもって視線を向けていきたいと思えた。
7. 議論の最後の方に出た、「分析をどう制度として組み込んでいくのか考えなければならない」というのが非常に印象に残った。やはり現場では、ただ行った政策の効果を分析するに止まらず、そこでわかった課題やまだ行っていない政策への評価を基にして制度という名の新しい政策を構築する必要がある。私たちは分析をして短時間でただ単純に分析で良いとわかった政策を改善する政策を提案するスタイルが多いが、そうではなくて上手くいっていない政策について制度の再構築をするなどの現場にあったスタイルの政策提案もしていけたら良いなと感じた。
8. 文部科学省の場合は、それほど大きな場所ではなかったので、議論と呼べるようなやり取りがしやすいということもあってか、各々意見を語っていたように思う。政策を提言する際、その政策が計画、実施、そしてその効果と行政の内部で担当者が数層に分かれているという事実に着目し、その政策がどこでは効率的であるのかということ意識する必要があるということ学んだ。
9. 文部科学省の議論においては、教育を生産関数で考えることへ、実状をなかば無視しているのではないかという側面からの批判的な議論が上がっていたが、賛否はさておき、教育経済学のみならず、我々のようにテータ分析を行う際には、そこで得られる結果は、良くも悪くも全体的なものになってしまうが、そこから提言につなげる際には、そのまま漠然とした提言ではなく、じつかりと現場の制度や実状を反映した提言に落とし込むことが、問題解決の議論の前提であるのだと強く感じた。
10. 文部科学省ではテータに関するお話がたくさんあった。テータの取り方や、何を目的にしてとられたテータなのか、そのテータは有効なのか、など、考慮しないといけない点がたくさんあるとわかり、テータを収集することが大変だと感じた。また、アンケートの内容に重複があることを教育委員会でも気づいていないかもしれない、とおっしゃっていて驚いた。
11. 文部科学省の方は、固さがありながらも優しさのある雰囲気があるように感じた。議論に関しては、他の省庁よりも多くの議論が行われていて、自らの問題意識こそが省庁の政策に何らかの影響を与えられるのだという思いを強くした。日本国民の、官僚組織への必要以上に厳しい視線が存在していると思う。この状況を変え、官僚がよりフレキシブルに動けるようになると、日本も内側から変わっていくのかなと感じた。
12. 自分たちが考えた論文が、実際に現場の人にどう伝わるか、非常に楽しみにして、この日を迎えた、文科省訪問だった。結論としては予想以上の収穫が得られたような気がする。文科省の方は自分たちの論文の改善点を指摘してくださりつつも、その先の話(教育の現状、その未来など)までしてくださり、議論が担当者对学生から場全体にまで広がったのがとても

印象的だった。それだけ教育問題は社会の根幹にあり、人々に深く根ざしているものなのだなあと考えた。

4. 政策提言ツアー実施の効果：企画者のコメント

2013年度に政策提言論文の全国大会にゼミ論文をエントリーし、その成果を実際に霞ヶ関での政策担当者に見てもらいコメントをもらうという「政策提言ツアー」を開始して、今年2017年度で5年目となる。毎年、財務省をはじめ、政策に関わる担当の省庁のみならずには、大変お忙しいところ、若い学生のチャレンジの応援という形で、お時間を作っていただいている。本当にうれしい限りである。実際に政策を設計している担当者と意見交換が出来る機会があることは、論文執筆の大きなモチベーションにも、また、今後、社会・政策のあり方を考える上で、貴重な体験となる。この体験をした学生が、社会に出て、社会問題に直面したときに、民間部門であれ公的部門であれ、この経験が役に立つことがあると確信している。それだからこそ、企画者および対応していただいた皆様への恩返しとなるのである。継続のための調整には時間もかかるし苦勞も多いが、学生の成長があってこそ、やりがいがある。継続は力なり。